

研究テーマ：まちの「かいわい」づくりの研究－呉市広商店街を事例として－	
研究代表者：地域創生学部 地域創生学科 地域文化コース 教授 和田崇	連絡先：t-wada1969@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者：なし	
【研究概要】 本研究は、呉市広商店街を近隣住民等多様な主体がそこに集い、互いに交流し、新たな価値や活動を生み出す「かいわい」と位置づけ、その再生方策を検討、提案することを目的に、土地利用調査とヒアリング調査、アンケート調査、イベント（ワークショップ）を実施した。その結果、広商店街は周囲にチェーンストアが多数立地し、商店街の経営環境が厳しさを増していることが明らかとなった。これに対して、県立広島大学生が「かいわい」「交流」をキーワードとした4つの活性化方策を提案し、商店街再生に向けた問題提起と関心喚起を図った。	

【研究内容・成果】

1. 研究内容

(1) 土地利用調査

2024年5月14日に学生7名の協力を得て、広商店街を中心とする広本町一帯の土地利用調査を実施し、土地利用図を作成した。この調査を通じて、広商店街は従来より店舗数が減少し、住宅地化が進展していることを確認した。

(2) ヒアリング調査

2024年5月14日に学生7名の協力を得て、広商店街振興組合および広まちづくり推進協議会への聞き取り調査を実施した。この調査を通じて、広商店街が抱える課題とその解決に向けたまちづくり活動の概要を把握した。また、2024年11月6日に学生5名の協力を得て、広商店街振興組合会員（29店舗）への聞き取り調査を実施した。調査項目は、業種、開業年、店主年齢、後継者有無、従業員数、営業時間、定休日、客層、経営方針、行事への参加状況、商店街活性化に対する意識である。

(3) アンケート調査

2024年7月下旬から8月上旬にかけて、広地区住民960名および広地区に立地する高校・大学の在籍生徒・学生を対象に、買物動向に関するアンケート調査を実施した。住民から320名（回答率33.3%）、高校生・大学生から286名の回答を得た。その後、回答結果の集計・分析作業を行い、集計・分析結果は9月9日に呉市商工振興課、9月13日に広商店街振興組合および広まちづくり推進協議会に報告した。

(4) イベント開催

2024年12月23日に呉市広市民センターにて、広商店街振興組合会員と広まちづくり推進協議会、ひろまち design factory（高校生）、呉市商工振興課職員等20名の参加を得て、広商店街のあり方を検討する「ひろまちデザインワークショップ」を開催した。このワークショップでは、上記調査結果の報告と本学学生による広商店街活性化プランの提案に続き、参加者全員による意見交換を行った。

2. 研究成果

(1) 広地区の生活環境

交通基盤の整備が進み、呉市の副都心に位置づけられる広地区は、人口減少が著しい呉市にあって人口減少率と高齢化率が最も低い。ロードサイドに多数のチェーン店が立地するほか、中核病院や小学校から大学まで教育機関が立地しており、買物や医療、交通、住宅、教育を中心に生活環境に対する住民の評価も比較的高い。

(2) 広地区住民の買物行動

広地区住民の多くは、高級衣料品など買回品こそ広島市周辺や東広島市など市外で購入するが、医薬品と日用雑貨、食料品、化粧品など最寄品の多くを広地区で購入する傾向にある。ただし、それら最寄品の購入店舗はロードサイドに立地し、駐車場を備えたドラッグストアやスーパーマーケットなどが主であり、広商店街を利用する者は商店街内に立地するスーパーマーケットで購入する者が約2割を占める食料品以外にはほとんどみられない。広商店街を「ほとんど利用しない」と回答した住民は6割弱を占め、「週1回以上利用する」と回答した住民は約2割にとどまった。このうち「ほとんど利用しない」と回答した者の割合は、70歳代以上が約4割、20歳代が9割弱で、世代間の差が大きい。

広地区に立地する高校・大学に通う生徒・学生も、回答者の約半分が食料品や日用雑貨、医薬品、化粧品などの最寄品を広地区で購入しており、広地区に居住する高校生に限ればその割合は7～10割に達する。しかし、それら最寄品の購入店舗をみると、食料品はコンビニエンスストア、日用雑貨と医薬品、化粧品はドラッグストアが最も多く挙げられている。広商店街を「ほとんど利用しない」と回答した者は約8割を占め、広地区居住高校生でも約7割に達している。

(3) 広商店街立地店舗の経営実態

調査対象29店舗のうち小売店は1950年代を中心に、サービス業や飲食店は2000年代を中心に開業した店舗が多い。店主は小売店を中心に60歳代以上が約3分の2を占めており、後継者のいない店舗は8割を超える。今後、事業拡大を検討する店舗は約1割にとどまる一方、現状維持をめざす店舗は約8割、縮小せざるを得ないという店舗は約1割であった。ほとんどの店舗が商店街内をはじめ広地区で開催される行事に参加しているが、広商店街の活性化策を考え、提案する店舗は約4割にとどまり、残りの約6割の店舗は活性化への意欲やアイデアをもっていないのが現状である。

こうした中で、呉市役所広支所職員の調整・後押しにより、広地区に立地する高校の生徒有志が「ひろまち design factory」を組織し、広商店街を舞台にさまざまな集客・交流イベントを企画・運営している。

(4) 大学生からみた商店街再生の可能性

県立広島大学生は広商店街の再生に向けて、広地区住民が気軽に立ち寄り、交流できる拠点施設を運営する「クロスロードカフェひろまちーコミュニティカフェを広商店街にー」、広地区の高校生が広商店街を題材に地域再生を考える探究学習に取り組む「広商店街×探究学習」、広商店街立地店舗でのインターンとSNS発信を組み合わせた「ひろまちワクワーク」、全国の高校生が広商店街活性化プランを競う「ひろまちデザイン甲子園」、の4つの方策を提案した。

3. 研究成果のアウトリーチ

(1) 学会発表

- 空間的組織化論からみた呉市広地区の人口維持メカニズム（松岡野乃花と共同発表）、地理科学学会 2025 年春季学術大会（2025 年 6 月 14 日、広島大学）

(2) メディア掲載

- 中国新聞（2024 年 12 月 27 日）朝刊「広商店街 活性化へアイデア」
- ミニコミ誌「くれえばん」1月号（2025 年 1 月 25 日）「広商店街活性化の一助に ひろまちデザインワークショップ」